

留学報告書

2019年12月13日

南山大学長
鳥巢義文殿

国際教養学部
准教授・中村督

留学報告書をここに提出させていただきます。

研究課題：近現代フランスにおけるジャーナリズムの社会史的研究——キリスト教民主主義の運動と倫理

受入機関：フランス社会科学高等研究院、レイモン・アロン社会学・政治学研究センター

留学期間：2018年4月1日～2019年8月31日

本留学の研究目的は、近現代フランスにおけるジャーナリズムの展開を社会史的観点から考察することであった。とりわけ大戦間期から解放期に至るキリスト教民主主義の運動に焦点を当てながら、ジャーナリズムの刷新にカトリック共同体が及ぼした影響を明らかにし、ひいてはジャーナリズム界の戦前・戦後の連続性を抽出することを課題とした。

こうした課題の下、報告者は、(1) 資料調査、(2) 研究交流、(3) 著作・論文執筆を基本的な軸として以下のように研究を進めた。

(I) 資料調査

本研究が歴史学の枠組みで進められる以上、資料調査が不可欠である。今回の留学ではさまざまな文書館・研究所に赴き、大きく作業を進めることができた。訪問した文書館・研究所のうち主たるもの限定して以下に挙げておきたい。

・フランス国立文書館（パリ）

国立文書館では、第二次世界大戦中 1944 年にアルジェで成立したフランス共和国臨時政府 (1944-1946) による新聞・雑誌改革の構想に関する資料を閲覧した。また、キリスト教民主主義系の新聞『ウエスト・エクレール』の戦争責任を問うた裁判記録も入手した。この資料は、等閑視されてきた『ウエスト・エクレール』裁判の一端を明らかにする重要なものである。

・イル・エ・ヴィレーヌ県文書館（レンヌ）

フランス西部の都市レンヌに位置する同県文書館では『ウエスト・エクレール』裁判の資料

を閲覧した。国立文書館の上記資料が裁判記録であるのに対して、この資料は裁判の実施にあたって収集されたものである。本資料はこれまで閲覧許可が出ておらず、未公開のままであった。しかし、今回、文書館職員やレンヌ第二大学の研究者の協力を得て、関係者（遺族）から許可を得ることができた。

・オート・サヴォワ県文書館（アヌシー）

フランス南東部のアヌシーにある同県文書館では、フランソワ・ド・マントン（1900-1985）の個人文書を閲覧した。マントンとは、レジスタンス運動を経て、戦後は人民共和派（キリスト教民主主義政党）の政治家として戦争裁判に関わった政治家である。彼の個人文書には、プレスの大粛清から新聞改革に至るまでの多くの資料が含まれており、それらを閲覧した。

（2）研究交流

研究交流に関しては、報告者の受入教員であるクリストフ・プロシャツソン教授との対話が貴重な機会となった。フランス政治史・文化史の第一人者である氏は、現在、社会科学高等研究院の学長でもあるが、適時、資料へのアクセスや研究者の紹介といった点で多くの助言をくれた。また、氏のゼミにも参加し、そこでさまざまな研究者と交流をもつことができた。同時に、同研究機関のパトリック・フリダンソン名誉教授とも定期的に面談し、とくに社会経済史に関する方法論の点で多くを教わった。

くわえて、報告者は、研究会や学会を通じて、ジャーナリズム史の分野で著名なクレール・ブランダン教授（パリ第13大学）やメディアと政治の専門家イヴァン・シュパン准教授（ヴェルサイユ・サン・カンタン・イヴリーヌ大学）とも、何度も議論を交わした。また、カリーヌ・グランピエール准教授（パリ第13大学）とは以前から、メディアのグローバリゼーションをテーマとする共同研究を通じて知己を得ており、今回の留学では本研究課題に関する直接的な意見をもらった。

（3）著作・論文執筆および翻訳

以上、資料調査と研究交流と並行して、著作・論文執筆と翻訳も行った。留学中に作業をし、2019年度以降に出版されるもの（刊行予定も含む）として、以下を挙げることができる。

- ・「ジャーナリズム」渡邊啓貴・上原良子編『フランスと世界』法律文化社、2019年。
- ・「戦後フランスの政治と社会」平野千果子編『新しく学ぶフランス史』ミネルヴァ書房、2019年。
- ・「文明的粛清の可能性——『ウエスト・エクレール』裁判の基礎的考察」大澤広晃・高岡祐介編『近現代世界の文明化の作用——「広域」の視座から考える』行路社、2020年（初校提出済み）

- ・「メディアとジャーナリズム」上垣豊編『はじめて学ぶフランスの歴史と文化』ミネルヴァ書房、2020年刊行予定（再校提出済み）。
- ・「1968年」『現代フランス哲学入門』ミネルヴァ書房、2020年刊行予定（再校提出済み）。
- ・クリスティン・ロス『もっと速く、もっときれいに——脱植民地化とフランス文化の再編成』人文書院、2019年（共訳）。
- ・ピエール・ロザンヴァロン『良い統治』みすず書房、2020年刊行予定（共訳）（再校提出済み）。

以上が報告である。繰り返しになるが、留学期間中に収集した資料の数は膨大であり、すべてを精読するにはまだ多くの時間を要する。しかし、研究交流を通じて得た助言を踏まえて、着実に資料を分析しながら、著作や論文として成果を公表していきたい。

末尾になるが、本留学の機会を与えていただいたことに心から感謝したい。なお、留学中は2018年度・2019年度パッセ奨励金 I-A-2 の助成も受けた。この点についてもお礼申し上げたい。